

## 変革して前進

### 吉田喜一教授

「産業技術高専なんてピンと来ない。航空高専がいいよ」

『吉田喜一教授のものづくり工学便り』でお馴染みの吉田喜一先生（60歳）のご紹介です。

産業技術高専で知らない人はいない存在。機械学会をはじめ、産業考古学会の理事長や、環境調査、学校と地域とが連携するとりくみと、いつも慌しく数多くの仕事を超人的にこなし、酒と学生をこよなく愛しており、多くの学生からは「喜一先生、キイチ」と呼ばれ親しまれています。

そんな先生は、日暮里（現三河島）の生まれ育ち。「きー坊が納豆売りに来たよ。って近所のおじさんやおばさんに言われてお母さんにばれて怒られちゃった。」小学5年の時、朝5時に起きて1時間、親に内緒で納豆売りをして小遣いを稼ぎました。10円の納豆を一個売って1円の儲け、当時1円で飴玉が5個買えました。児童労働にゆるやかな時代、貧しいけど近所の優しさに包まれていた長屋生活、戦後の昭和がそこにはありませんでした。「進学を諦めて就職するしかないと思っ

ていた」

当時、高校の進学率は低く中3の夏、入退院を繰り返していたお父さんを亡くしました。お雛様が欲しいとねだる妹に「階段で2人座ってなさい」と機知に富んだ答えをするお母さんは優しく強くたくましかったそうです。そんなお母さんの勧めで、都立航空高専・機械工学科の2期生に合格。本当は文学が好きだったので、手に職をつけようと方向転換しました。母子寮に入った母と妹と別れ、親戚を転々としながら高専を卒業して20歳で通産省に入りました。親戚のおばさんが作ってくれたお弁当がおいしく、今でも感謝しているそうです。主任教授の要請で、1年後に助手として高専に帰ってきた後、昼は高専で助手、夜は都立大・機械工学科に通い在学中に結婚。

「子供をおんぶしてねんねこ半天を着て保育園に」  
教授までも平坦な道のみではありませんでした。46歳の時、マサチューセツ大へ留学する前の4ヶ月間、家族と離れて町屋に住みお母さんの介護の為、お昼も学校から戻る日々を送りました。多忙の中での介護、認知のはじまったお母さんに「今、言ったじゃないか」  
「生徒に言っていることが思わず出ちゃったんだよね」

お母さんに続き、苦勞して支えあった妹さんも亡くなりました。

先生の笑顔から、そんな苦勞は微塵にも見えません。常に自分を変えて、前進して喜一先生、変わらないのは弱者に対する柔らかな眼差しです。

「ものづくりは人作り」  
フリーター対策や中小企業の後継者対策に取り組んだり、子供達にもものづくりの楽しさを教えようと荒川区だけでなく、近隣区でも奔走中。産業考古学会としては、今は無くなってしまった高橋造船所の資料作りにも取り組んでいます。新高専の産学公交流センター主任として各種行事のコーディネートをやっています。夏休みにはいろいろなものづくり教室やオープンキャンパス（体験入学）が催され、親子でペットボトルロケットを作って飛ばす行事もあります。12月と冬休みは中学生ロボコンがあり、また、NHKの高専ロボコンの競技委員もやっています。ロボコンの様子は年末年始に繰り返し放送されます。テレビの実況中継アナウンサーの後にいる喜一先生を見つけてください。3月の荒川区産業展の各種の催しにも参加しています。これらの会場で喜一先生を見かけたら気軽に声をかけてください。  
荒川区になくはならない人です。